



ご挨拶

自治医科大学看護学部

学部長 野口 美和子

本年4月に新入生を迎えて、看護学部ははじめて1学年から4学年が揃いました。4学年420人が揃うとさぞ賑やかなことだろうと思っていましたが、3年生が4月早々から実習に入っていたので、思ったより校舎は静かです。空き時間や昼食時間は、寮生が寮の自室に戻っていることが多いのですが、空時間を自習で過ごしたり昼食を摂ったりするのに、学生サロンだけではいよいよ手狭になっています。対策をとらねばなりません。自治医科大学では、将来学生会館の建設も検討されていますが、まだまだ先のことです。

4年生が、県内の各地にある保健所、保健センターで、それぞれ少人数に分かれて地域看護学の実習をしています。実習場所により交通にかかる費用と時間のかかり具合が異なっており、予想を



超えて負担が大きい学生もいることから、これも工夫しなければいけないと思っています。

いろいろ解決しなければならないことがあります。学生は順調に、というより予想を超えてすばらしく成長していると思います。教員達の評価はもとより、非常勤講師の先生方からも「すばらしいレポートを書いてくれる」とか、実習を受けてくださっている保健師の方から「実習での学びが深い」と感心されたグループもあるようです。4年生が成長したことは、そのための学部であり、カリキュラムですから、当然といえば当然ですが、実習の帰りに目を輝かせて、「今日は、お年寄りのご家庭を訪問して来ました。」という報告内容を聞くと、私も感動してしまいます。

地域看護学実習が終わると、4年生は卒業研究と国家試験の勉強に入ります。また、それぞれ就職を考え、試験を受けることになります。看護学部では、国家試験対策委員会と、学生委員会の中に就職支援のための教員の組織（進路（就職）プロジェクトチーム）を設けてそれぞれ活動を開始しています。特に国家試験については、全員合格を目標に、学生も教員も頑張っています。保護者の皆様からも学生に対し一層の励ましをお願いいたします。

高齢化社会において、看護職はますますサービスを充実させることが求められています。介護保険が導入され、その見直しが行われました。国民の生活の向上にとって、高齢者がより自立した生活を送れることが、最優先課題であります。介護保険でもこれからは介護予防に力を入れていくことになります。心身両面からの健康アセスメントに基づき、家族も含めて総合的な支援ができる看護職への期待が高まっています。

このような社会のニーズを受けて、各県で看護学部の開設が相次いでいるのです。当看護学部でも、倫理的で高い看護実践力をもつ卒業生を世に送るよう、カリキュラムを見直し、教育方法を一層工夫していきたいと思っています。また、より高い専門的能力とリーダーシップを身につけた看護職を育成するための修士課程を開設すべく、今年6月大学院の設置を申請したところです。

まず、4年生の皆さんが、先生方の個別の指導により、しっかりした看護の考えにたった立派な卒業研究を行い、自らが身につけた看護観を確かめ、そして国家試験に合格してください。自治医科大学の看護学部の本当の歴史は、それから始まるのだと思います。



夢の実現に向けて

1年 渡邊 由里

自治医科大学に入学し、早4ヶ月が過ぎようとしています。寮生活にも慣れ、勉強やクラブ部活動など、自分の生活パターンをつくって行動できるようになりました。入学当初は、1から10まですべてのことを自分ひとりでしなければならない生活に戸惑いや不安を感じていましたが、今では、困った時には頼りになる友達・先輩がいてくれるおかげで、毎日楽しく過ごせるようになりました。おそらく、このような友達や先輩がいなかったら、今のように充実した日々を送ることができなかったでしょう。

また、何事にも積極的に参加することで様々な刺激を受け、それによって私自身も成長していけたらなと思っています。勉強面も同じで、自分を甘やかしてばかりではいつまで経っても自分のためになりません。自分が悩み苦しんだ分だけ大きな結果が得られるのだと思います。

憧れていた大学生活を有意義なものにするためにも、自分の目標と気持ちをしっかり持ち、周りの人たちと協力し合って自分の夢の実現に一步でも近づけるよう努力していきたいです。これから先、4年間を良くするのも悪くするのも自分次第なのだから。

憧れの大学生活

1年 関谷 真由美

私は、小学校の頃から自治医大に憧れていました。広大なキャンパスに、特色ある医学部との交流、そして親切な先輩方や先生方。こんな恵まれた環境の中で、大好きな看護を学べていることを大変嬉しく思っています。入学してから、勉強、クラブ活動、寮生活での家事などと、とても忙しい毎日を送って

ますが、疲れを感じません。それは、きっと一日一日が、充実しているからだと思います。毎日が楽しくて仕方ありません。

前期の授業では、看護について学ぶことはもちろん、机上の勉強だけではなく、農家に有機農法の見学に行ったり、地域の高齢者と触れ合ったりするなど、自治医大特有の楽しい授業がたくさんありました。

11月には、附属病院で早くも実習が始まります。看護技術の演習で学んだことなどを使って、精一杯患者さんと接したいと、今から楽しみにしています。

新たな学生生活

3年 御子柴 清美

私は、日々進歩や変化をしていく医療とともに、看護も大きく変化しつつあると感じ、今日学ぶべき看護の基礎が私たちの時代とどのように変わってきているのか、そして本来の看護のあり方をもう一度考え直したい、自分の知識をもっと深めたいという思いから、編入学することを決めた。

4月から授業が始まり、臨床の場にいた3月までとは生活が大きく変わり、新たな学生生活が始まった。生活環境の変化に戸惑いながらも、さまざまな授業の中の学びや、これから看護師になろうと頑張っている1・2年生との交流がいい刺激となっている。今までは後輩達にいろいろ教えるという立場であったが、今は私が教えてもらう立場であることに少し違和感を覚えるが、それもまた面白く新鮮である。講義が進んでいくにつれて、理論に裏打ちされた看護の素晴らしさやエビデンスの大切さを学ぶことができ、毎日が充実していて、講義はまさに「目から鱗が落ちる」といった状態である。臨床にいた時は、慣れで何となくこなしていた看護が、授業を通し

てとても新鮮に感じられる。演習室には、実際に自分の目で見て、耳で聞くことができる人体模型などがあり、患者さんに実際に接しているようであり、正常・異常といった基礎的知識を多く学ぶことができる。

自治医科大学看護学部は、これからの社会に対応していけるよう、地域・僻地看護のカリキュラムが充実している。そして、自ら学



んでいくということの大切さを教えられ、主体的に学習していける環境が整っていること、人間としても大きく成長していける場であることもとても大きな魅力である。教授と学生との距離が近く、いつも笑顔や笑い声の絶えないこの暖かい環境が私は好きである。寮に帰れば、自分のプライベート空間もしっかり確保できるようになっているし、寮の自治会など学生たちが進んでいい環境作りを目指し協力し合うといった活動もしっかりしている。同期の編入生たちは、10人というとても少ない人数ではあるが、さまざまな壁にぶつかった時、協力し合い助け合うことができるとても大切な仲間である。

2年間という短い学生生活ではあるが、さらに看護の視野を広げ、将来さまざまな看護の場で貢献できるよう、日々を大切にしていきたいと思っている。

各 学 年 の 近 況

ビタミンN2

2年 八木沢 恵理子

ここでは、看護学部3期生である、現2年生の様子を伝えるよう言われているのだが、何から言おうか正直迷う。よく言えば“元気がいい”。悪くいえば“うるさい”。私は、この学年の仲間が好きだ。

みんな個性があって、その人らしく生きているのに、どこかまとまりがある。困ったときは、何を言わずとも手を差し伸べてくれる友達がいる。学業だけでなく、クラブ部活動やアルバイトも両立してやっている友達もいる。寝る間も惜しんで10月の薬師祭に向けて準備している友達もいる。もちろん頭が下がるほど勉強している友達だっている。とにかくみんなが、何事にも一生懸命である。

遠く離れた地で、我が子はうまくやっているのかしら？と、不安なご家族の皆さん、ご

安心ください。みんなで楽しくやっています、と私は胸を張って言いたい。私たちは1人1人がお互いのビタミンとなって、足りないところを補い合い、未来の自分たちに胸を弾ませ、今を一生懸命に生きているから。

臨地実習を終えて

3年 山本 由佳

4月から始まった4ヶ月間にわたる母性、小児、成人、精神、老年の各領域の臨地実習（以下、実習という）が終わりました。この4ヶ月は様々な人と関わり、多くのことを考え、学んだ日々になりました。実習で得た学びは学習としての学びとしてだけでなく、自分の成長に繋がる学びになりました。

特に印象に残っていることは、長い間寝たきりの患者さんで表情も暗く、苦痛や気持ちを自分から表わすことのない方と関わった時

のことです。のどが渇いていないか、痛い思いをしていないかなど、患者さんが苦痛に感じていることをこちらから気づいていけるように関わりました。実習が終わる頃には患者さんの表情も見違えるほど明るくなり、苦痛を我慢することなく、要望を言ってもらえるようになったことは、患者さんに信頼してもらえていると実感でき、嬉しい気持ちでいっぱいになりました。

実習を通して、多くの人と出会い、深く関わる中で、自分を信頼してもらうためには、相手への思いやりやいたわりの気持ちを伝えていくことが大切であることを改めて考えさせられました。この実習での経験や患者さんとの関わりを大きな財産として大切にしていきたいと思います。

助産学を選択して

4年 都倉 久美子

私が助産学を専攻した理由は、“生命誕生”という感動的な場面に立ち会い、対象とする家族とともに「生命の始まり・家族の始まり」の喜びを共有しながら仕事がしたいと考えたからです。専攻学生のなかには将来、NICU看護師や保健師で母子保健に携わることを志望している人もいます。

今年度から4年次の助産学専攻が開始されました。4年間の学びで保健師、助産師、看護師の3つの国家試験受験資格が得られること、また助産学専攻学生数を10名程度としている大学が多いなか、自治医大では15名という広い枠が設けられていることは、非常に恵まれていることだと思います。

授業内容は、外部講師の方による講義や、先生方の臨床での体験談など興味深いものが多く、日々楽しく学ぶことができます。演習時間が多いので、学んだことをすぐに実践することができ、また、わからない部分は先生方が丁寧に指導して下さるので、疑問を残すことなく学びを深めることができます。15名で講義を受けるため、仲間意識や結束力が高まり、お互いに励まし合いながら学びを深めることもでき、約半年間、助産学を学んできて「専攻できてよかった」と心から思っています。

助産学に興味・関心がある人はまず、3年次に開講される選択科目を履修してみるといいでしょう。

それから専攻するかを考えても、決して遅くはないはずです。身近にいる専攻学生にも気軽に話しかけてみてくださいね。きっと親身になって相談に応じてくれると思いますよ。

学生の自主的活動

学生自治会発足に向けて

4年 江角 伸吾

私たちは、看護学部の1年生から4年生で構成されるメンバーで、看護学部学生自治会発足準備委員会を作り、平成17年10月の看護学部自治会発足を目指して、昼休みや放課後の時間を使い活動をしています。自治会発足に向けた活動を開始した経緯や、現在までの私たちの活動をお知らせしたいと思います。

自治医科大学看護学部ができて今年で4年

目となりました。初めて全学年がそろい、「自分たちの学生生活がどのようになったらよいか」ということを考えられる余裕も少しずつでてきたように感じます。そのような中で、通学生と寮生とでは大学生活に関する情報を得る速度が異なることや、学生各自が学習環境や大学生活をこんな風にしていきたいという思いをもっている、それをどのようにして実現していったらよいかわからない学生がいること等がわかってきました。そこで、自

分たちの学習環境や大学生活を自分たちの力でより良いものにするために看護学部自治会を発足させ、活動していくと共に、先生方とも意見交換ができるような会を作りたいと考えました。

自治会準備委員会では、まず始めに、既に自治会の活動を行っている医学部の先輩から自治会がどのような活動を行っているかを聞きました。次に、看護学部すべての学生に自治会発足の是非を問うアンケート調査を行ったところ、約8割の学生から賛成であるという意見を得、看護学部自治会の必要性を確認することができました。そして現在は、会則や各種委員会等も含めて組織を検討し、案を作成し、役員選挙、発足式、第1回総会に向けての準備を進めているところです。

看護学部自治会の目的は、本学の理念に基づき会員の自治意識を高めるとともに会員相互の親睦を図り、学生生活の充実及び発展を図ることです。ビタミンNが皆様のお手元に届く頃には、既に自治会は発足しているかもしれません。看護学部自治会はこれからが本当のスタートであり、紆余曲折あることと思います。学生のみなさん、協力し合ってこの自治会をより良いものにしていきましょう。

先生方や保護者の皆様、私たちの学習や学生生活にご指導・ご協力いただいている皆様には、看護学部自治会の活動を温かく見守っていただきたく、どうぞよろしくお願い致します。

栃木県健康リーフレット作成委員会の活動

3年 近藤 佑圭

健康リーフレット作成委員会は、栃木県健康福祉部健康増進課の呼びかけのもと、栃木県の大学、専門学校に通う学生10名で結成されました。リーフレットのテーマは「生活習慣を見直し健康的な生活を目指す」であり、討論を重ね、先生方の監修のもとリーフレッ

トは作成されました。一度身についた生活習慣を改善するという事は、言葉で言うのは簡単ですが、実際は難しく、その人自身が変わろうと思えば行動に移さない限り、生活は変わってはいきません。私たちはこのリーフレットを手にした方々が、自分の生活習慣を見つめ直す一つのきっかけになればと思いを込め、作成にあたりました。

リーフレットはストーリー形式になっており、そこにはダイエットに夢中な高校生の女の子と、飲み会大好きな大学生の男の子のカップルが登場します。歪んだ彼らの生活習慣を考え直すため謎のドクターが登場し、2人が生活を見直すきっかけをあたえるといった内容となっています。「あなたの体重何キロですか？」という興味を引く題名やストーリー展開、親しみのあるキャラクターなどの工夫をはじめ、BMIの計算方法や適正体重が一目で分かるルーレット、生活習慣を見直すチェックリストなど、様々な工夫が盛り込まれ、読者が自分の状況を見つめなおす機会が提供されています。

このリーフレットは、なるべく多くの同世代の方に手にとっていただけるよう、栃木県の高校や大学、専門学校、今年6月に井頭公園で行われたイベントで配布しました。

討論を重ね工夫をし、それぞれが知識を深め製作したリーフレットは、私たち一人一人の思いが込められた自信作です。製作に携わったこの経験を今後活かすとともに、そこで学んだ知識を周囲に広めていきたいと思えます。



本人が描いたリーフレットの挿絵の一コマ

ク ラ ブ 活 動

陶 芸 部

2年 小林 由佳

我が陶芸部では、毎回様々なお料理に合う器を作ろうと、試行錯誤を繰り返しています。部員には料理好きの人が沢山いて、鯖の味噌煮に合う器を作りたいとか、サラダがもっと美味しく見える器を作りたいなどと言いながら、和気藹々とした雰囲気で作成活動に励んでいます。私は、今年の夏休みに「涼」を感じる器に挑戦しようと考えています。食卓でも夏を感じられるようにしたら、食事が楽しくなります。同じお料理でも、器によってさらに美味しく感じるのは不思議ですね。このような雰囲気作りは、生活の中の楽しみのひとつといえるのではないのでしょうか。

陶芸には以前から興味がありましたが、入部してからは陶芸をより身近に感じるようになりました。お店で素敵な器をみかけると、自分のイメージが膨らみ、創作意欲が出てきます。自身が抱いているイメージどおりに器を作ることは、容易ではありません。日常生活の些細なことから感性を磨き、いつか思い通りのものを作りたいです。

初めての窯焚きに向けて、部員一同頑張っています。



フットサルサークル

2年 菊地 陽

自治医科大学フットサルサークルは、クワガタ好きの初代男子キャプテンとぺこちゃん似の笑顔がたまらない初代女子キャプテンを筆頭に、女子35人、男子33人、計68人の愉快で楽しい仲間達で構成されています。このサークルは、フットサルを通じて多くの人々が楽しむことを目的として平成13年に発足しました。

ところで、皆さんフットサルってご存知ですか。フットサルは、5人対5人で行う、言わばミニサッカーです。練習は、水曜日と金曜日の週2回、2時間程度大学内のグラウンドで行っています。年に2回程、県外などで行われる女子の試合にも出場しています。その中でも、やまとなでしこカップという大会は毎年出場している私たちにとって特別な大会であり、日々‘なでしこ制覇!!’を目指して練習に励んでいます。

最後に私にとって、フットサルサークルは‘心のオアシス’です。勉強や実習で疲れた時にほっとさせてくれる学年を越えた仲間がいて、エネルギーを満たしてくれます。そんな素敵なサークルで、皆さんも一緒にボールを追いかけてませんか。



ボランティア活動

離島調査ボランティアをして学んだこと

—利島—

4年 大野 絢子

私は、昨年(2019年)の8月3日から5日までの3日間、東京都利島村における「住民の健康生活上のニーズ調査」のボランティアとして活動しました。利島村は、伊豆七島の一つで東京から約140km離れた人口約300人、面積4.12km²(ディズニーランドの5倍)という小さな島です。

島民の約8割が親戚関係にあるということを知り、私は大変驚きました。また、島という周りが海で囲まれた環境では、台風などが来ると、食料をはじめ日常生活用品などを乗せてくる船が港に着けなかったことや、病気などで島外への病院への緊急搬送が必要な患者が出てヘリコプターが飛ばないことなど、天候によって島民の生活に非常に大きな影響が出てくるという事実を改めて知りました。

また、利島は地形的に安定した港を作ることが難しく、大型船が接岸できるようになったのは昭和55年ということでした。大型船が接岸し、荷物の積み下ろしに必要な桟橋がどのような経緯で作られたのか、桟橋がないときはどのようにして船の荷物を積み下ろししていたのかなどについて島の人々から教えていただき、島の人々がどれほど苦勞して現在の状況を築き上げてきたのかを知りました。

さらに、小さな島では噂が広まるのも早く、年に1回のがん検診などについても先に検診をすませた住民がたまたま検診で苦痛を感じたりすると、その噂が島全体に広がり、その年の検診受診率に影響を及ぼしたこともあるという話を聞きました。保健医療従事者の対応が、1年に1回の島民の健康状態を知る大切な機会を減らすことにもなることを知りま

した。このことは、島民と継続的に関わり、島民の健康を支える保健師の活動においても重要であると思います。このように特殊な環境にある離島に生活する人たちにこそ保健師が必要であると感じました。

離島調査ボランティアを経験して

—青ヶ島—

4年 川島 梓

私は昨年、看護学部の先生方が実施した東京都青ヶ島村における「住民の健康生活上のニーズ調査」にボランティアとして参加しました。青ヶ島村は東京から約360km離れた伊豆諸島最南端の有人島で人口は約200人です。八丈島から、さらにヘリコプターで20分かかります。断崖絶壁に囲まれた、世界でも珍しいというきれいな二重式火山の島です。

調査ボランティアに参加して、まず驚いたことは、前日までの台風により10日間、定期船が港に着くことができず、野菜などの食物が手に入らないということでした。食物に限らず、多くの生活物資も島外から調達するものが多く、離島における生活上の困難さを知りました。しかし、そんな時には近所で物の貸し借りをを行うのが当たり前という島の人々の話を聞き、青ヶ島での生活を続けるために住民同士で支え合い、困難を乗り越えてきたのだということを感じました。

この島では、6年目になる一人の村保健師が中心となって島民の健康を支援していました。青ヶ島村として保健師は初めての採用であり、6年前の就職当時は保健師活動になかなか理解が得られなかったということでした。しかし、現在の住民と保健師の信頼関係は非常に深く、これは保健師が長い年月をかけて築いてきたものであると感じました。この信頼関係があるからこそ、より生活に密着

した支援が可能となり、このことは看護職の活動において非常に重要なことであることを改めて学びました。

調査から帰る前夜、島民の憩いの場であるという島内唯一の居酒屋を訪れてみました。そこには、調査中にお会いした島民の方を始めとしてたくさんの島民の皆さんが、会話やカラオケを楽しんでいて、住民のつながりの強さを感じることができました。

3日間という短い滞在期間でしたが、島の人々のつながりの深さや温かさ、離島にお

る生活上の困難さ、看護上の課題など多くのことを学ぶことができました。ここで感じたことや学んだことを今後の看護に活かしていきたいと思っています。



各領域の研究室・教員紹介

*母性看護学領域*****

教授 成田 伸

母性看護学領域のメンバーは、教授1人（成田伸）、講師1人（大原良子）、助手3人（岡本美香子、稲荷陽子、加藤由香里）の総勢5人です。本学は助産師の養成も行っており、母性看護学の講義・演習・実習と、助産学の講義・演習・実習を担当しますので、教員が5人いてもフル稼働状態です。もちろん、全員助産師の資格と臨床経験を持っています。

母性看護学は全学生が対象であり、講義・演習では母子の援助から女性の健康支援まで幅広く学びますが、実習の中心は周産期・育児期の母子です。入院中の母子を受け持ちますが、弟に教える姉モードで経産婦さんが男子学生の受け持ちを受け入れてくださり、どうしたら母親が楽に育児できるかの安楽ケアを中心に、どの学生も誠意を込めて、かつ楽しく微笑ましく学ばせていただいております。育児期の母子の実習では、地域の助産師の協力を得て、育児相談等に参加し、育児や母乳不足に悩む母親の実態を学んでいます。

助産学は、3年次後学期開講の2科目を除いて、3年次末に選考された15名の学生を対象に行います。本格的な教育は今年から始まりました。卒業までに10例程度の分娩介助が

課されており、4施設にお願いしている助産学実習も9週間という長期に渡る予定です。

教授を中心に「熟練助産師の産婦のモニタリング」、また講師を中心に「子どもを亡くした母親への継続的な支援」について研究しています。また山形県立保健医療大学の教員と協力し、「栃木県・山形県での母乳育児支援」の研究を行い、それぞれの地域の助産師、産科医、小児科医、その他の方々と協力して、ホームページの開設等支援活動を推進しています。



*精神看護学領域*****

教授 永井 優子

精神看護学は、考えたり感じたりする「ひとりのひと」のあり方を尊重し、その人らしく生きていくことを支援するために必要な知識や技術を研究・開発する学問で、看護基礎

教育の柱となって8年目です。赤ちゃん（誕生）から高齢者（死）まで、そして個人、家族、集団、地域などを幅広く対象とし、対人関係を土台にして、人間行動の理解をもとにその人が日常生活でセルフケアを維持し、その能力を（再）獲得するように看護過程を展開して援助します。

私のほか、西岡和代助教授、田中京子助手、関澄子助手の4名は、学生にとって「実体」が見えにくく、イメージ化が難しい精神看護学をわかりやすく教授する努力を重ねています。1年生では「看護学概論」で全体像を示し、「成長と発達」で精神の発達を学習します。2年生では「ヘルスアセスメント」（97%が選択）で精神情緒状態の査定方法を、「精神看護学概論」と「精神臨床看護学」で基本的理念と基礎的な援助方法を学びます。3年生の「精神看護学実習」では、精神科の入院患者や社会復帰施設を利用して地域で暮らす精神障

害者の具体的な援助を学びます。4年生では「卒業研究」で自分の関心からテーマを決めて深め、まとめることを指導します。来年度は精神専門看護師の養成を目指す大学院開設（予定）と日本精神保健看護学会第16回学術集会の開催のため、さらに忙しくなりますが、こころのケアができる看護職の育成を目指して励んでいます。



海外紀行

モナッシュ大学とルーラル看護

母性看護学 講師 大原 良子

モナッシュ大学の看護学部は、メルボルンから約150km、農業が主な産業であるラトロープ市に存在します。この看護学部の学生は、社会経験者が多いという特徴があります。このような学生のほとんどが、都市部からのUターン者です。この学部の立地場所が非都市部であることから、ルーラル看護という新しい領域の看護教育を提供しています。ルーラルとは、牧歌的な農村部という意味ですのでニュアンス的にやや違いがありますが、日本のへき地に相当すると思ってください。

今回、このルーラル看護を学ぶためにモナッシュ大学で研修をさせていただきました。ルーラル看護は、在学を一年延長して教育を受けます。授業は、交通事故にあった患者への応急処置、分娩介助、心筋梗塞の発作を起こした患者への対応、糖尿病の昏睡を起こし

た患者への対応など、緊急時の処置の方法を学びます。その他、リハビリテーション、ガン患者の疼痛コントロール（緩和ケア）など、慢性期から回復期の看護も学びます。ですから、急性期から慢性期まで幅広く高度な医療技術を学ぶことができます。このような処置は、へき地で医師がいない緊急の場合に限り看護師でも実施可能と法律で認められています。しかし、勝手に投薬を行ったり、手術を行ったりということは認められていません。



このルーラル看護を学べる学生は、希望者でかつ成績が上位25番以内という制限があります。このコースを卒業した学生は、無医地区だけでなく発展途上国などで医療を提供している団体からも引っ張りだこだそうです。日本の無医地区で働く看護師さんたちにもこのような教育が提供できるといいですね。

もう1枚の写真はRawson Community Health Centreを写したものです。男性の方が、人口800名の無医地区で働く地区看護師のAlanさんです。Alanさんは、看護師免許だけを有しています。地区にある分校の養護教諭から在宅の介護、緊急処置など幅広い看護を提供しています。無医地区で25年間看護師を続けているという、へき地看護師のリーダーでもあります。様々な無医地区で働く看護師さんたちとインターネットで情報交換やアドバイスをしています。Alanさんは、時代とともに変化する住民のニーズに柔軟に対応した看護支援を行うことで地区の住民から高い信頼を得ています。例えば、高齢化により車の運転ができなくなった方たちを町の銀行やスーパーマーケットに連れて行くのもAlanさんの新しく考えた支援の一つだそうです。このように型にはまらない住民に必要な支援をすぐ提供でき、支援に対する評価もすぐ住民から返ってくるので、看護師としてとてもやりがいがある仕事のように感じました。

へき地に住む方々がニーズにあった医療を受けられるように支援することは、医師だけでなく看護師も取り組むべきことであるとつくづく感心させられました。



教員名簿 (平成17年9月1日現在)

領域	職名	氏名
学部長	教授	野口美和子
一般基礎	教授	高村 寿子 (学生委員会委員長 1学年担任)
	教授	渡邊 亮一
専門基礎	教授	竹田 俊明
	教授	竹田津文俊
基礎看護学	教授	松田たみ子 (教務委員会委員長)
	講師	大久保祐子
	講師	里光やよい (2学年担任)
	講師	真砂 涼子 (1学年担任)
	助手	亀田 真美
	助手	角田こずえ 川上 勝
地域看護学	教授	篠澤 侁子 (学生委員会副委員長 寮務主事)
	助教授	春山 早苗 (4学年担任)
	講師	岸 恵美子
	助手	鈴木久美子
	助手	佐藤 幸子
	助手	舟迫 香
精神看護学	教授	永井 優子
	助教授	西岡 和代
	助手	田中 京子
	助手	関 澄子
母性看護学	教授	成田 伸 (4学年担任)
	講師	大原 良子
	助手	稲荷 陽子
	助手	岡本美香子
	助手	加藤由香里
	助手	
小児看護学	教授	川口 千鶴 (教務委員会副委員長 2学年担任)
	講師	朝野 春美
	助手	多田 敦子
	助手	黒田 光恵
成人看護学	教授	中村 美鈴 (寮務主事)
	助教授	水野 照美 (3学年担任)
	講師	山本 洋子
	講師	内海 香子
	講師	清水 玲子
	助手	村上 礼子
	助手	棚橋 美紀
	助手	
老年看護学	教授	水戸美津子 (3学年担任)
	講師	高木 初子
	講師	亀山 直子
	助手	林 美鳥
	助手	

年間スケジュール

前学期

4月

- 4/8 入学式
- 4/11 授業開始(1年)
- 4/29~5/5 春季休業
- 5/14 大学創立記念日
- 7/26~7/29 定期試験

7月

夏季休業
8/1~9/25

後学期

10月

- 9/26 授業開始
- 10/7~10/9 学園祭
- 12/24~1/3 冬季休業
- 1/24~1/27 定期試験
- 3/10~ 卒業式
- 3/22~ 学年末休業

3月

編集後記

看護学部の開設から4年が経ち、ようやく全学年が揃うこととなりました。そのため、今回のVitamin Nは全学年の学生より記事が集められ、充実した内容となりました。学生は活気に満ち溢れ、強い意欲、積極性を示しており、教員も期待に応えようと、より一層力が入っています。校舎はととても賑わい、看護学部全体の雰囲気是一段と明るくなったように感じられます。

さて、来年の春にはいよいよわが自治医科大学看護学部の第1期生が卒業を迎え、この学び舎から巣立っていくこととなります。このVitamin Nに込めた願いのとおり、友人や家族、教員からより多くのVitaminを吸収して、それを自らの糧として欲しいと思います。そして、より大きく成長し、素敵なNurseとして羽ばたいて欲しいと編集委員一同心より強く願っております。

編集委員代表 林 美鳥 加藤由香里

ビタミンN 第2号

発行日 平成17年10月
発行 自治医科大学看護学部
〒329-0498
栃木県河内郡南河内町薬師寺3311-159
TEL 0285-58-7409